



下層から出土した縄文土器



縄文時代中期末の土器

縄文・弥生時代の朝見遺跡

今年度の調査によって、朝見遺跡の東側が、縄文・弥生時代の集落や墓域だったことがわかりました。

1区や6区では、縄文時代中期末（約4,500年前）の土器が数多く出土しました。石器は、矢じりや打欠せきすい石錐（漁に用いた錐）が目立ちます。当時のひとびとは、草原での狩猟や川・沼での漁業をなりわいとしていたでしょう。

県内の低地で縄文時代中期の生活跡が見つかることは非常にまれで、貴重な成果といえます。



弥生時代終末期の方形周溝墓

弥生時代終末期（約1,800年前）の方形周溝墓が5基見つかり、当時の墓域が予想以上に広いことがわかりました。
（※方形周溝墓…四角い墳墓の周囲を溝で囲んだ墓）



調査遺跡名：朝見遺跡（第5次）、中坪遺跡（第2次）
所在地：三重県松阪市立田町・和屋町
調査面積：約9,900m²

原因事業名：高度水利機能確保基盤整備事業（朝見上地区）
調査実施機関：三重県埋蔵文化財センター
調査期間：平成26年4月21日～平成27年1月（予定）

あさみ 朝見遺跡（第5次）発掘調査 現地説明会資料 （その2）

～松阪市立田町・和屋町～

2014.11.29 三重県埋蔵文化財センター



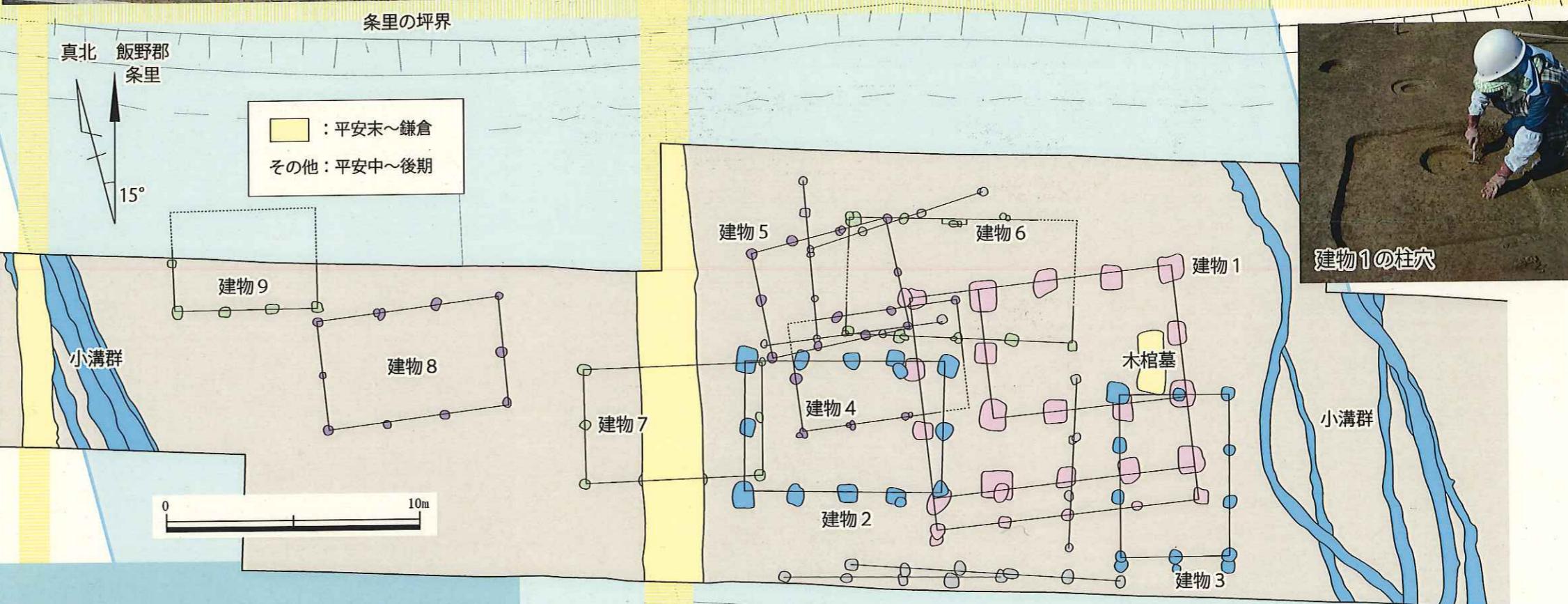
平安時代の大型掘立柱建物が見つかりました

朝見遺跡は、櫛田川左岸の平野（標高4～7m）に営まれた縄文時代から中世の広大な遺跡です。周辺には、条里地割とよばれる古代以来の耕地区画がよく残っています。

これまでの調査で、平安時代の大溝や井戸から、青銅鏡3面や緑釉陶器の優品、木製祭祀具、役人などが用いた石製の帶飾り、墨書き土器など、当時の高級品や珍しい遺物が多数出土しました。このことから、役所などの公的な施設が存在したか、豪農あるいは貴族などの有力者が関わった耕地経営の拠点であると考えられています。しかし、建物の所在地や集落内部の様子は全くわかっていないませんでした。

今回、遺跡の中央で大型の掘立柱建物を含む10棟以上の建物群が見つかり、遺跡の性格を知るうえで重要な手がかりが得られました。





いろいろな井戸が見つかりました



平安時代の大型掘立柱建物と集落の様子

7区の掘立柱建物群は、南北方向の小溝群にはさまれた区画内に建てられています。ここには、条里地割とは異なる正方位の地割（東西約 50m）があったようです。区画の外側にはほとんど遺構がありません。

最も大型の建物1（10世紀前半）は、南・西側の2面に庇、さらに南側に縁が付きます（東西約 10m、南北約 9 m、庇・縁を含め梁行4間、桁行4間）。柱穴は一辺が約 1 m の方形と、当時の柱穴の大きさとしては県内でも最大級で、耕地経営の拠点（居館）あるいは付属建物であると考えられます。

ところが、建物1が廃絶すると、新たに建物2・3（10世紀前半）が建てられ、規模もやや小さくなります。その後は、建物4～9などの小規模な建物や木棺墓がつくられたようです。正規の役所（郡衙など）のように、同じ位置で建物が建て替えられ、長期間にわたって存続することはありませんでした。

一方、大きな柱穴をもつ主要な建物は、空閑地をはさんで数カ所（6区・7区西・9区）に点在していることもわかりました。隣接する大蓮寺遺跡などの調査成果をあわせると、朝見遺跡の一帯には、田畠の中に複数の耕地経営拠点や水辺の祭祀場、寺院（大雷寺廃寺）などが点在していたと推測されます。

なお、6区で出土した土器には「七西井」と墨書きされていました。旧飯野郡では、「一宮田」のように、数字と里名（地名）を組み合わせて用いる例があり、本例も付近の条里の里名を記した可能性があります。